

湊川短期大学

平成18年度第三者評価
機関別評価結果

平成19年3月22日

財団法人 短期大学基準協会

湊川短期大学の概要

設置者	学校法人 湊川相野学園
理事長	古林 美代子
学 長	大前 衛
A L O	大森 雅人
開設年月日	昭和27年4月1日
所在地	兵庫県三田市四ツ辻1430

設置学科および入学定員(募集停止を除く)

学科	専攻	入学定員
人間生活学科	生活福祉	40
人間生活学科	人間健康	40
幼児教育保育学科		120
	合計	200

専攻科および入学定員(募集停止を除く)

専攻	入学定員
幼児教育専攻科	20
	合計 20

通信教育および入学定員(募集停止を除く)

なし

機関別評価結果

湊川短期大学は、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていることから、平成19年3月22日付で適格と認める。

機関別評価結果の事由

1. 総評

平成17年7月1日付で当該短期大学からの申請を受け、本協会は第三者評価を行ったところであるが、評価の結果、当該短期大学は、自らの掲げる教育理念の実現および教育目標の達成に向けて順調に進捗しており、本協会が定める短期大学評価基準を充たしていると判断した。

上記の判断に至った事由は、おおよそ次の通りである。

建学の精神、教育目的・教育目標は、全学および各学科・専攻に明確に示され、さまざまな機会を通じて周知され、必要に応じた点検も行われている。また、理事会、教授会、学生における共通理解への努力も認められる。

教育課程は体系的に編成され、多様な学生のニーズに応えるものとなっている。授業内容、教育方法および評価方法が学生に分かりやすいシラバスによって示されている。

教員組織、教育環境、図書館など教育の実施体制は確立している。

教育目標の達成への努力は、授業満足度、退学、進学、休学、留年者対策それぞれにおいて努力がみられる。特に主要資格取得に関しては目標達成への努力が顕著である。

入試に関する支援、学習や科目選択のガイダンス、学習支援のためシラバスなど、基礎学力が不足する学生に対する取組み、学習の悩みなどの相談には組織的に取組むとともに、成績優秀学生には奨学金を出して、学業意欲を高め、学生支援および進路支援体制は十分に整備されている。

研究活動については、教員の研究にかかる経費の支出や研究成果の発表の機会も確保されており、また科学研究費補助金も得ている。すべての専任教員に個人研究室も整備されており、就職、進学、生活指導のほか全学生への卒業研究の指導も行われている。

学生の社会的活動に対する評価が積極的で、長年にわたるボランティアの実績を培っている。国際交流・協力への取組みでは、留学生の受け入れを継続的に実施している。

学校法人の管理運営体制は確立し、機能している。事務組織については、業務の執行はおおむね適切に行われている。教職員の就業に関する規則も適切に整備され、経営サイドと教職員との関係も良好であり、全体として管理運営は適切に行われている。

財務運営の状況、財務体質の健全性、施設・設備の整備およびその管理はおおむね適切

である。

自己点検・評価の実施体制は確立しており、改革・改善のためのシステム構築への努力、相互評価への取り組みの努力は、これまでの実績から見て大いに期待できる。

2. 優れていると判断される事項など

(1) 優れていると判断される事項

評価領域 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

建学の精神、教育目的・教育目標は、全学および各学科・専攻に明確に示され、さまざまな機会を通じて周知、必要に応じた点検も行われている。また、理事会、教授会、学生に共通に理解される努力を認める。

評価領域 教育の内容

完成度の高い「履修ガイド」が十分に活用されている。共通の教養科目「湊川のあゆみ」は注目できる。高等学校との連携、留学生対象の日本語教育が評価できる。

評価領域 教育目標の達成度と教育の効果

平成15年よりグレード・ポイント・アベレージ(GPA)による学業評価システムを採用し、この結果を学外実習受講基準および表彰基準に活用している。

評価領域 学生支援

進度の早い学生の上位5%に成績優秀者奨学金制度を設け学習意欲向上を図り、基礎学力の不足する学生には学力向上のための授業科目を複数設定している。結果として生活福祉専攻の100%をはじめ、人間健康専攻、幼児教育保育学科も90%を超える就職率を達成している。

カウンセラー、精神科医、臨床心理士も含めて、学生のメンタルケアやカウンセリングの体制が充実している。

評価領域 研究

科学研究費補助金の応募と採択がある。

評価領域 社会的活動

学生の社会活動に対する支援、評価が積極的で、長年にわたるボランティアの実績がある。

評価領域 財務

中期経営計画（「湊川相野学園活性化3カ年計画」（平成14年度～16年度））の策定とその実行による財務体質の改善に取り組んでいる。

評価領域 改革・改善

理事長・学長が自己点検・評価および第三者評価を改革・改善へつなげていく契機として積極的にとらえ、教職員も一致して全学的な体制で取り組んで行く強い意欲を感じた。

（2）向上・充実のための課題

評価領域 教育の実施体制

蔵書検索システム、開館時間の延長サービスは利便性を向上させ、図書館の活用をさらに活発にさせると予想される。

O A教室などはおおむね整備されているがO A教室の空き時間は限られており、引き続きコンピュータ台数の確保と学生がいつでも使える環境確保に努力されたい。

学生による授業評価は全ての教科について実施することが望まれる。

評価領域 教育目標の達成度と教育の効果

卒業生の就職先への調査、進学先、卒業生から在校生へアドバイスの出来る機会、また、同窓会との連携を緊密にすることをさらに配慮されたい。

評価領域 学生支援

長期履修制度については、前向きに検討されたい。

評価領域 管理運営

事務部門の主要なところは教員が兼務していることから、事務職員のスタッフ・ディベロップメント（SD）活動の取組みが望まれる。

（3）早急に改善を要すると判断される事項

なし

領域別評価結果

評価領域		評価結果
評価領域	建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標	合
評価領域	教育の内容	合
評価領域	教育の実施体制	合
評価領域	教育目標の達成度と教育の効果	合
評価領域	学生支援	合
評価領域	研究	合
評価領域	社会的活動	合
評価領域	管理運営	合
評価領域	財務	合
評価領域	改革・改善	合

評価領域 建学の精神・教育理念、教育目的・教育目標

建学の精神・教育理念とも確立しており、明確に示されている。入学式、卒業式、新入生オリエンテーションなどを通じて、周知徹底の努力がなされている。さらに、学生便覧や学園誌なども有効に活用されている。

教育目的・教育目標は全学および各学科・専攻に明確に示され、点検についても平成10年より2度実施されている。

学生に対しては、入学時のオリエンテーションおよび総合教育科目教養科目「湊川のおゆみ」を通じて教育目的・教育目標の周知と理解を図り、教員については月1回の学科会などにおいて教育目標の確認をしている。理事会での審議、決定過程においても、教授会、学科会での審議内容が十分に伝達され、理事会、教授会、学生における共通理解への努力が認められる。

評価領域 教育の内容

明確に示された教育目的、教育目標に基づいて編成されており、各学科、専攻に建学の精神、教育理念が反映できている。学科との関連、内容、教員などは整った教育課程となっており、さらに改善への対応が着実に進められ、短期大学としての水準をおおむね充たしたものとなっている。

それぞれの学科において、取得可能な免許、資格などについて要件が明確に示され、教育課程の授業形態、必修・選択のバランスも適切である。学生の多様なニーズに応える選択科目の設置と自由選択の保障を含めて、幅広い学生のニーズに対応可能な教

育課程となっている。しかし一部の授業において大規模授業にともなう問題点がうかがえる。設置する学科などの卒業要件は適切であり、履修ガイド、学生便覧を通して平易に説明がなされている。シラバスにおいて授業の概要、方法が示され、意欲的な履修をうながす工夫がなされている。教員は教材作成、プレゼンテーションや添削などによる工夫をしており、アンケートでは特に、実験実習、実技科目にその反映結果をみることができる。

事前に学生に配布されるシラバスは、授業内容、教育方法、評価の方法およびテキスト・参考書などがわかりやすく明示されており、意欲を持って学生が履修できる。

ファカルティ・ディベロップメント（FD）活動や学生による授業評価を行い、教員は授業改善に意欲を持って取り組んでいる。また教員間および兼任教員との意思疎通の努力も認められる。教員の能力開発の研修が実施されているが、授業改善を支援するSD活動は今後の課題である。

評価領域 教育の実施体制

教員は授業や学生指導のみならず、改革・改善にかかわる各種委員会にも意欲的で、研究活動にも積極的に取り組んでおり、学位、研究業績など、短期大学の教員にふさわしい資質を有した教員組織が整備されている。

教育環境は整備、活用されている。学内LANも整っておりIT教育も可能であるが、学生がいつでも使えるコンピュータの台数と場所の確保は学習の意欲をさらに引き出すであろうと考えられる。

参考図書コーナーを設けて学生の便宜を計るなど、学生の図書館利用を活発にするための努力や、図書選定システムも整備されている。また生涯学習活動の支援などとして、図書館を地域社会に開放するなど意欲的である。

評価領域 教育目標の達成度と教育の効果

授業の単位認定、単位修得状況は妥当であり、担当教員による学習評価は適切に行われている。「授業評価アンケート」、「学生アンケート」、「学生生活実態調査」から、学生の実態を総合的に読み取ろうとする努力が認められる。退学、休学、留年の状況はGPAの影響もあり少ないとはいえないが、チューターによる個別面接、カウンセラー紹介などの対策が講じられている。GPAによる厳しい制限にもかかわらず、主要資格取得者数は増加の傾向がみられ、努力の様子がうかがえる。

専門就職の割合は高いが、卒業生の就職先からの評価についての体系的な調査は行われていない。また、同窓会とのさらなる連携も望まれる。

評価領域 学生支援

入試要項に入学選抜の方法は適切に記載され、学科・専攻ごとに各種案内冊子により入学手続き、学生生活のためのオリエンテーションなど適切に行われている。

学科・専攻独自のガイダンス資料を作成し、基礎学力向上のための授業科目を設定し、チューターや卒業研究指導教員、健康相談室の指導の下、保護者との連携も図られている。

生活支援のための教職員の組織が整備され、通学支援、住居支援もなされている。クラブ・サークル活動は、学友会とともに教員による顧問体制と学生の自主的な運営により活発な活動を展開している。日本学生支援機構奨学金、独自奨学金（複数制度）が用意されている。

教職員からなる進路指導委員会が組織され、専門職としての就職率向上に向けて努力している。

韓国一志学園飛鳳総合高等学校との姉妹校提携に基づき留学生を受け入れ、経済・住居支援、日本語学習支援を行っている。

評価領域 研究

専任教員は3年間に最低1本の論文を発表する、という申し合わせが平成15年になされ、専任教員32名中、30名は過去3年間に研究業績がある。研究活動は研究開発支援総合ディレクター、紀要、学園機関紙に公開している。基盤C、若手Bの科学研究費補助金の採択が毎年ある。幼児教育保育学科においては、3つのテーマで平成16年4月から共同研究がなされ、日本保育学会などで発表されている。

研究費は確保されており、平成17年度末に専任教員すべてに個人研究室も整備され、研究に必要な専門の雑誌や図書の購入も充分されている。

評価領域 社会的活動

三田市との共催で「三田市民大学」、出前講座への講師派遣、平成13年から訪問介護員養成研修、平成17年より介護技術講習会を実施している。地域の子どものメンタルケア、学校カウンセラーの派遣、地域子育てセンターへの協力などで地域と交流活動を行っている。また科目等履修生、聴講生の受け入れ、図書館の一般開放を行っている。

学友会、一般学生が中心となり、7つの社会的活動が行われている。生活福祉専攻では授業外の取組みとして福祉施設でのボランティア活動をすすめ、課外活動の日を設定し、奨励している。

留学生の受け入れを継続的に実施している。これまで教員が海外で調査や国際試合の

監督として活躍している。平成18年4月に韓国学校法人との姉妹校提携、学校法人一志教育財団および東信教育財団と教育研究交流協定を結び、教職員の交流が深まるよう努力している。

評価領域 管理運営

理事会、監事、評議員会とも、寄附行為に基づいて適切に管理運営がなされている。理事の構成についても、問題はなく、管理運営体制は適切に運営されている。学長は、教授会と理事会との協調関係に配慮しながら、適切なリーダーシップのもと、学則などの規定に基づいて、教授会、大学運営協議会、各種委員会など適切に運営しており、短期大学の運営体制は確立し機能している。事務室などの整備はなされており、事務の決済処理の流れや書類の管理は適切である。就業規則、給与規程などは整備されている。教職員の協力体制も整っており、関係も良好である。規程などの整備状況、互いの立場を尊重しつつ協力する体制ともよい状態にあり、人事管理は適切に行われている。

評価領域 財務

事業計画および予算は適切に執行されている。財務・経理・出納の各業務が、必要な承認手続きとともに適切、かつ円滑に行われている。資金の管理と運用については、資金運用体制と「資金運用規程」が整備され、運用に当たっては事業法人と運用アドバイザー契約がなされている。消費支出比率、人件費比率、教育研究費比率などの財務比率は特に問題がない。当該短期大学および学校法人全体の収支状況、資金の維持管理状況など財務体質はおおむね健全である。短期大学の教育上の物的資源は適切に管理されている。また、施設設備などの管理についての危機管理対策（火災、防犯、避難訓練など）や省資源対策も適切になされている。

評価領域 改革・改善

自己点検・評価は平成10年から行われていたが、平成16年自己点検・評価委員会として組織的に確立した。自己点検・評価委員会は、改革・改善を推進する中心的な委員会として位置づけられ、毎年細かな見直しを行いつつ、3年に1回を目途に自己点検・評価報告書を発行する計画である。平成17年度には平成14年～平成16年までの3ヶ年の自己点検・評価を「湊川短期大学の課題と現状2004年版」にまと

め各短期大学、関係機関などに送付している。なお、自己点検・評価活動には多くの教職員が関与するよう配慮されている。

自己点検・評価の結果を中・長期的課題として、学内システムの見直しや学科改組などの改革・改善につなげてきた努力および実績から、今後も自己点検・評価を改革・改善のためのシステム構築とその実現へ結び付けていくことが期待できる。

今回の第三者評価から次回の第三者評価の間に相互評価を実施する計画であり、取り組みへの努力が期待できる。